

早くビールが飲みたい。

今回のレポートのタイトルは、【国境へ行こう~イラン~パキスタン編~】となっているが、本当は、【さっさと国境へ行こう~イラン~パキスタン編~】である。

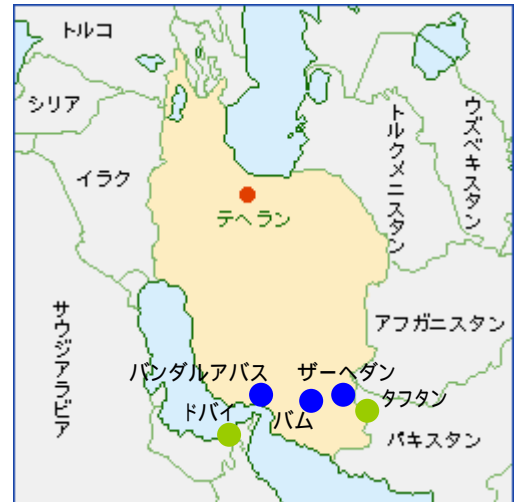
バムへ

イラン南東部、パキスタンへさほど遠くない場所に【バム】という街がある。

ここには遺跡もあるらしいのだが、東から西、西から東へ進む旅人の拠点になっているそうだ。私はパキスタンって国をほとんど知らないんで、その情報が欲しい(一体ビールやワインは幾らなんだ)。

加えて、パキスタンとの国境の街【ザーヘダン】は、一説によると薬物中毒の人が多いため、ここには泊まらずに、バムを早朝に出て一気にパキスタンまで行ってしまった方がいい、という情報もある。

こんなに厳しい国なのに、何故かヘロイン中毒が社会的問題になっていたり、武装麻薬密売組織がいたりするものイランである。



旅行代理店に行って、バンドルアバスからバムへ飛行機が飛んでいないかを確認する。

イランの国内線はとても安い事で有名で、20ドルとか25ドルくらいで飛べるとガイドブックに書いてある。

結果、バンドルアバスからバムまで飛行機で行ける事は分かったが、何とテヘラン経由らしい。三角定規もびっくりするぐらいの鋭角フライトである。さすがにバスに乗る事にした。

因みに、イスラムの国では、店で働く人は圧倒的に男性が多いのだが、旅行代理店には女性も多い。旅人には嬉しい。



写真撮影は、イランではほとんど断られる。この旅行代理店でも口説くのに5分も費やした。

ホテルを出てバスターミナルに向かう為、タクシーに乗る。しかし私が後部座席に乗っても出発しない。そこへ男性が一人乗ってきた。なんだこのタクシー乗合か、と思っていると、さらに女性が3人やってきた。後ろに乗っていた私は前の席へ移動させられる。つまり運転手の隣に男二人。超きつきつで発車。女性の隣には男性を乗せない、というイラン。これはバスでも一緒。女性が座っている隣には、空いていても男は座らない。実に徹底している。

バスターミナルの食堂で例によってサンドイッチを食べ、ガムガムコーラを飲む。店によってはピクルスやトマトをたくさん入れてくれるのだが、さすがにもう飽き飽き。

バスチケットを買い、バム行きのバスに荷物を入れる。がしかしバスには何故か乗車させてくれ

ない。まだ早いと言う。バスの影で暑さを堪えながら待つこと 20 分。ようやく出発の時間になり、全員がバスに乗車。

今までバスに入れてくれない理由が分かった。このバス、ベンツ製ながらクーラーがなかったのだ。イランのバスは、トルコ並みに設備が良いときいていたが、そうでないバスもあるようだ。中はサウナ状態。そのまま 10 分くらい待つ。まいった……。次のパキスタンでは北部だけを旅する事に決定した。でも女性は辛いだろうな。全身黒ずくめで。

バス発車。ようやく窓から風が入ってようやく生き返る。

途中、何度も検問があるのだった。7 時間のバスの行程で 7 回。大体は運転手が身分証明書を持って警察のところに行って終わりなのだが、1 度は全員がバスから下ろされて荷物検査があった。薬物は東から西に流れているそうなので、我々の西から東へ行くバスをここまで厳重にチェックする目的がわからない。

確かに私から見ると、女性以外は全員怪しい顔つきである。しかしそれはすべてイランの男どもであり、この国では普通の庶民だったりする。

窓を開けていれば快適だが、イラン人、風が嫌いなのか寒いのか、よく分からないが窓を閉めたがる。しばらくイラン人達とバトル。

どうやらイラン人と私とでは暑さに対する感覚が違うらしいって事が分かった。途中で密輸っぽい感じの一団が大量の荷物を持って乗り込んできたのだ。中身は毛布。入りきらなくて 1 枚 1 枚を客に配って座席の下に入れてもらっている。しかし人によってはそれを羽織ったりしている。しかし、どうみてもバスの中は暑いだろ、お前さん。

因みに、この毛布のビニールのカバーには、“Super High Quality : Japan Tokyo”などと書かれている。何でもありだな。

『捨てられた街』バム城砦

バスはきっちり 7 時間でバムに着いた。

早速宿に荷物を置き、タクシーをチャーターして、バム遺跡に行ってみる。

入り口でお金を払おうとすると、『お前、国はどこか』と聞かれ、“ジャパーン”と答えると、『おおっ、ジャパーンか。それはそれはウエルカム。無料でいいよ』

とあっさりただになった(でも後で、同じ宿のオランダ人にきくと、誰でも無料のようだった。もったいつけやがって)。

バム城砦の起源は、3 世紀ごろらしいが、現在の形になったのは 14 世紀かららしい。

その時は 6 平方キロの中に、9000~13000 人が生活していたらしい。

しかし、1722 年にアフガニスタン人に包囲され、街は放棄される。



“捨てられた街”が、巨大地震によって本当に完全な廃虚になってしまった。もう修復は不可能と思う。

その後も侵略を受け、人の住まないこの一帯は『死の街』と呼ばれるようになった。そんな名前が付いていながらも、ガイドブックの写真をみると、なかなか味わいのある魅力的な遺跡となっているのだが、この廃虚が、本当に廃虚になってしまったのは2003年12月26日のバム大地震だ。

バム遺跡はこの地震によって徹底的に破壊されていた。

城のスタイルはヨーロッパ調だが、石ではなく日干し煉瓦と土で塗り固めて作られていたようだ。それが一斉に崩れてしまった。

やがては土に帰ることだろう。そのペースがだいぶ早まったといえる。

実はこのバム城砦も、修復が進んでいたらしい。“廃虚然とした様子が見られるのもあと数年”などと古いガイドブックには書いてあるが、あと100年ぐらいは“廃虚然”というか“廃虚そのもの”が見られるに違いない。それほど徹底した廃虚だった。

大地震は、現在のバムの街も徹底的に破壊している。何だか遺跡みたいな住居跡が多い。

当時、このバムには125,000人が住んでいたが、この地震で30,000人が亡くなったそうだ。何と人口の24%もの人が一瞬にして亡くなったことになる。



緑と水の多い街“バム”。荒野の多いイランでは珍しいほど素敵なオアシスなのに、よりによってここで大地震とは。

不毛なイランの大地にあって、このバムは実に緑が豊富な場所で、どこから来るのか、歩道脇の溝には結構な勢いで水が流れている。

そして椰子の木を始めとてたくさんの木々が緑ゆたかに生えている。何でこんな場所が、大地震に選ばれてしまったのだろうか。皮肉なもんだ。

バムは観光都市という側面もあったので、その打撃は大きい。

『バム遺跡が破壊されたので、バムには行く価値がない』とか『震災で治安が悪くなっている』という噂が旅行者を遠ざけている。

以前のバムを見た事がないのでその価値は分からないが、治安に関しては問題ない様だ。至るところに警察官や軍人が立っている。

それでも人は強い。徹底的に破壊されながらも懸命に生きている。

建設資材を運んだたくさんのトラックが街を走っている。ブルドーザーも夜遅くまで活躍している。人々はバイクや自転車でせっせと物資を運ぶ・・・。

建設途上の建物がたくさんあった。実は、私の泊まっている宿も震災でやられ、今日、寝る場所はテントである。因みに一泊3万リアル(386円)。さすがに安い。

バザールは、徹底的に破壊されたようで、現在はコンテナ並べて店を開いている。

ラマダンの夕方のせいか、野菜や果物、肉類、お菓子やさんが大繁盛していた。

あと1時間で食事タイムなので、会社帰りの買い物という感じだ。

他のイスラム国では目立たなかった女性の買い物姿も多い。安いお店では、黒い服の女性達が群れていてちょっと異様だったりもするが。



アジアを感じさせるバイク。黒ずくめの女性を送り迎えしている夫をたくさん見た。

敬謙な非イスラム教徒である私は、それまで待てないのでジュースを買ってお店で隠れて飲んだ。さすがに夕方ともなると、おおっぴらには飲めない雰囲気がある。

特に、皆が苦勞しているこの街では飲めない。あのナッツを食べては道路にぺっぺと捨てるイラン人が、さすがにラマダン中はしていないのだった。さすがに厳格なイスラム国家。

肉屋さんで羊肉の細切れを買おうとすると、『どっから来たんだい?』と聞かれる。そして『おおっ、日本人かもってきたな』とただでくれた。震災で苦しんでいても人の心は、限りなく優しい。



街の肉屋さん。注文があつてから、つるしておいた羊をさばいて売るみたい。

イランからパキスタンへの最も長い日

この日、朝の5時半に起きて準備する。

そして、

【乗合タクシー バス 乗合タクシー <国境> バス 乗合タクシー 乗合タクシー 飛行機 タクシー バス 乗合タクシー】

という、結果として怒涛の50数時間連続移動攻撃の始まりであった。

イランのバス

バムから、イランの国境の街ザーヘダンまでのバスでの出来事。

私が乗ると、若い添乗員が、3万リアルだとぼった食ってくる。宿のオヤジにバス代は2万リアルと聞いていた。嫌な奴だ。

“こいつが噂のイランの意地悪世代か”と思い、教育的指導を込めて1.5万リアルだけ払おうとすると投げ返された。彼は怒って助手席に戻っていった。嫌な奴だ。イランで初めて、人絡みの嫌な思いをした。

バスの倉庫に荷物を人質として取られているので、途中で捨てられやしないかと、少し不安な気分だが、あんな嫌な奴はほっておくに限る。

次に停車した時に『降りろ』と促す添乗員。嫌な奴だ。こんな奴は無視するに限る。するとしばらくして向こうから交渉にやって来た。私と一緒にザーヘダンから乗った女性に、まず『バス代は2万リアルである事』を証言してもらおう。次に、『彼が3万リアルを請求した事実』を近くの前の人々に証言してもらおう。『さっきの少ない5000リアルは、俺を騙したペナルティだぜ』と説明し、『わかったか、もうするなよ』と2万リアルを支払った。バスの車内では皆が注目し、圧倒的に私に軍配が上がっていた。う~ん、さすが旅する教育者である。すると、彼は2万リアルを受け取って、5千リアルをお釣にくれやがった。車内で拍手が起こったが、彼には言葉が通じていない様なので、何だかただのせこい交渉になっていた。う~ん、さすが旅する貧乏人である。結局1.5万リアル(193円)。そして嫌な奴はいつの間にか私になっていた。

イランのタクシー

イラン側の国境の街、ザーヘダンに到着。たくさんの人にパキスタン西部の都市クエッタまでの飛行機の有無を聞いたがと無いという。風邪をひいたままなので、何としても楽をしたいのだった。ガイドブックには週一便と書いてあるのだが、今は陸の移動しかないようだ。バスターミナルの誰に聞いても飛行機は無いという。しからは鉄道という事になる。毎月2本国際列車が走っていて、ガイドブックによると今日はその日だ。しかし誰に聞いても鉄道は無いという。となると、ザーヘダンからタフタンというパキスタン側の国境の街までミニバスで行って、そこからバスでクエッタという事になる。しかし、そのミニバスまで無いという。今はタクシーしかない。しかもそのタクシーは、国境まで一人3万リアルだという。乗合にもかかわらず3万リアルらしいのだ。また始まったよ、全くぼっている、とこの時は思った。というのも、イランではこれまで、乗合でないタクシーでさえ2~5千リアルしか払った事が無い。商売上、タクシーの運ちゃんが言う言葉には全く信憑性が無いのだが、もう一人、私と同じようにパキスタンに行くと言う客がいる。パキスタン人だった。パキスタンのパスポートを私に見せながら『飛行機も鉄道もミニバスも無い、そして3万リアルなんだよ、一緒に行こう』と言うのだった。国境を挟んだだけの2つの街を移動するだけで3万リアル???。でもこのパキスタン人からはオーラが出ていて、何となく説き伏せられてしまった。訝しがりながらもそのままこのオーラオジサンとタクシーに乗る事に。

車は砂漠にひかれたアスファルトの道路を突っ走る。『あれっ、ザーヘダンって国境の街じゃないの?』と聞くと、

『そうさ。でも国境からは100キロ離れている』という事だった。合点がいった。単なる勉強不足である。

100キロ、日本なら3万円コースじゃないか、よかったリアルで。3万リアル、386円である。しかし、3万リアル以上の価値？が、このドライブにあったのだった。

このタクシーの運ちゃんは前の車を煽るのである。

さらに我々の車を抜かそうとする車があると、急にスピードアップして抜かさない。

やがて、一台と競争の様な形になり、やけにスピードを出している。

遠くの方に見える対向車があっという間に目の前に現れてはビュンと通り過ぎていく。無茶苦茶怖い。

何気にスピードメーターを見ると、なっ、なっ、何と190キロを指しているではないか。表示されている最高速度は220キロである。

この車はだいぶ新しい様だが、三菱以外の日本車だろうな、頼むぜ、と思って車種を確認しようとすると、何と日本車じゃない・・・。

さらに・・・どうもドイツでもフランスでもイタリアでも韓国でもない。

さらに恐怖が増した。

その後も数十台を抜かしながら、結局1時間ほどで国境に着いた。ジェットコースターに1時間ほど乗っていた気分である。

日本で1時間もジェットコースターに乗っていたら、1万円コースじゃないか、よかったリアルで(ってそんな事はしないか)。



190キロで砂漠のアスファルトを疾走する運ちゃん。後はフランスのエンジンを積んだイラン製の車。

到着しても固まっている私に運ちゃん曰く、『なかなか楽しかっただろ、なっ。この車、エンジンはフランス製で、車体はイラン製なんだ。ベリーグッド』と自慢気に言う。

次は10万リアル払うから、自分で運転したい。

タフタンの街

イランもパキスタンもイミグレはあっという間だった。

パキスタン人のオーラオジサンと一緒にだったのでクエッタ行きのバス代が300ルピーから200ルピー(357円)になった。

まだ2時過ぎだが、バスの出発は5時だという。ああ飛行機だったら時間の無駄にならなかったのに。

仕方なく、このオーラオジサンと一緒に食堂に入る。実は朝から何も食べていないのだった。しかしラマダン中。しっかりとした食事は5時過ぎにならなと出てこないらしい。

揚げ物のお菓子を買ってコーラを飲んだ。コカコーラだった。

気がつくともオーラオジサンも余裕の顔して飲んでいる。

『いいの？ ラマダン中に』と尋ねると、

『私はクリスチャンだから』と言う。

しかも聞いてみると“牧師さま”らしい。なるほどオーラが出ている理由が分かった。

彼は時々外国を回り、布教活動をしているそうだ。今回はイラン各地を訪ねたらしい。イスラム大国でいい度胸だ。

5時にバスに戻る。すると発車は5時半だという。チャンスと思い、さっきの店に戻り食事を注文する。カレーとパンが出てきた。

なっ、なっ、何と、実に美味いじゃないか。パンはチャパティと呼んでいるようだ。このチャパティも美味しいしカレーも美味い。こんな美味しいカレーは本当に久しぶりだ。感動的でした。新宿にお気に入りのインドカレーやさんがあって時々行くのだが、その店より圧倒的に美味い。まっ、イランから来て事も影響しているかもしれないが。

バスに戻るがなかなか発車しない。出発は7時になったという。ラマダンだから皆、飯を食べているのだろう。

そして結局バスが発車したのは、夜の8時であった。

つづく